第九回茶話会

満中陰と年忌法要の歴史 2022年10月30日

第九回の目次

- □ 現代の日本における中陰と年忌法要
- □ インドの輪廻
- □ インドの四十九日
- □古代中国
- □中国の輪廻
- □ 仏説預修十王生七経
- □ 古代日本
- □日本の輪廻
- □ 佛説地藏菩薩發心因縁十王經



中陰とは

□ 現代日本の、逝去から中陰まで 逝去した人間は枕経で仏教の真理を教示され、 通夜で(形式的な)剃髪をし 授戒し 次の世での授記(成仏の確約)を願われ、 葬儀で引導を受けて肉体から霊魂が離れる。 死んでから生まれ変わるまでの期間・存在を 中陰(=中有)という



没後作僧

□ 没後作僧(もつごさそう)亡くなってから僧侶になる葬儀の形態。(⇔授戒会・生前戒名)

慈悲の心で生き物を殺さず、もろもろの戒律を守っている者、が上品上生(じょうぼんじょうしょう)を実現できる 『観無量寿経』(5世紀中国)

満中陰

□ 満中陰とは 定義は、四十九日(=七七日)の事、 中陰の期間が満了される事 七日ごとに死後の審判を受けて来世の行先を決められる 四十九日でこの世に生まれ変わる

年忌法要

□ 年忌法要 年忌の日に死後の裁判があって、 命日より前に遺族が供養する

現在は初七日から三十三回忌 故人の生前の罪を軽減し行き先を良くすることが出来る

遠忌という50年と100年の供養は輪廻転生後の供養

本日の議題

□現代日本の輪廻転生

矛盾はどこからくるのか

閻魔大王に審判をされた後、 あの世(浄土≒天国)か地獄に行くような・・・ 虫や動物に生まれ変わるような・・・ ずっと天から祖先が見守ってくれているような・・・ 弔い上げは三十三年忌まで(四十九日よりとても長い)

インドの輪廻(1)

□ リグ・ヴェーダ(前1200-前1000) 地獄の記載なし

最初に死んだ人間として天界への道を最初に見出した者、天界の王者ヤマ 死者の行先は天上の楽園、そこで父祖たちと会いヤマと一緒に住む

□ 後期ヴェーダ(前1000-前500)

エジプト 死者の書(前1600-前1000) 死者を裁くという概念

ヤマは地下の地獄の主と変遷

冥界では、人間の生前の善悪の行為を量るという文章(シャタパタ・ブラーフマナ) →後々の時代の、死後の審判という考えに影響を与えたとされる

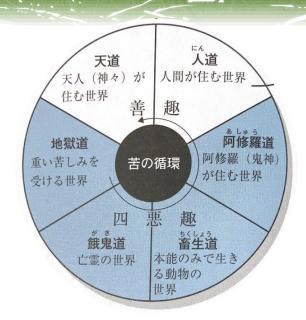
※天界⇔奈落=地獄(地下)すべてはこの世の中にある

インドの輪廻②

ブラーフマナ (前600頃)『輪廻』の登場

この世の五道(もしくは六道)を転生する

- ※阿修羅道は地獄道に含まれていて 後の大乗仏教成立時代に分離した説
- □ 仏教成立 仏陀 (前463-前383頃) 輪廻からの解脱を説く
- □ 最初期仏典スッタニパータ(前317-前180頃) 悪業をなした者は地獄に行き、種々の責め苦を受ける 他にも地獄への言及は経典・論書に数多く存在する



インドの輪廻③

□ 大毘婆娑論(インド仏教の原典成立は200-300頃)等の仏典 玄奘(602-664)漢訳

四有(しう)の明示(輪廻や死後観の発達)

- □ 生有(生まれる瞬間)
- □ 本有(生きている期間)
- □ 死有(死ぬ瞬間)
- □ 中有(死んでから次の生を受けるまでの期間)

インドの四十九日

□ 中有(=中陰、死んでから次の生を受けるまでの期間) 当時は4説あり、列挙されたのみで優劣は語られていない 中陰の状態は虚弱であり、7日しか留まる事が出来ない。 行き先が決まらなければ、一度死んで再び中有の世界に生まれるとされる

- □ 少時 短期間住するのみ
- □ 中陰七七 最長でも四十九日で決まる
- □ 中陰七日 何度も7日間を繰り返す
- □ 不定 早い人も遅い人も居る

この当時、死んでから生まれるまでは 生前の業によって自動的に決定している(死後の審判はまだ存在しない)₁₁

古代中国①

- □ 仏教前の中国
- □ 論語 孔子 (前552-前479)

先進第十一 より 季路が神様に使えることについて尋ねた 「まだ人に仕えることが充分にできないのに、 何故神に仕えることができようか」 季路が更に死について尋ねた 「まだ自分がこの世に生まれ、 生きていることも分からないのに、 どうして死が何であるかが分かろうか」

孔子の時代には、体験しようのない死後については 問わないという風潮であった

生 知 9K 知

古代中国②

□ 礼記(前漢の時代、前206-8頃成立) 巻二十一「雑記」

「*土は三ヶ月にして葬る。是の日也や、卒哭す*」 「卒哭」とは親の死後百箇日のことを指す 他に親の死後

> 「小祥」 1 3 月の祭り (→一周忌) 「大祥」 2 5 月の祭り (→三回忌)

□ 古代から中国では死者に対する<u>遺族の</u>服喪の期間として 百日、一年、三年を節目にしていた これが儒教の「三年の喪」

中国の輪廻

- □ インドから中国への仏教伝来 1世紀ごろが始まりとされる
- □ 鳩摩羅什(314-366)をはじめ3世紀以降経典の漢訳が進む 仏教の地獄の思想が取り入れられて死後を意識するようになる
- □ 中唐の時代 (766-826) 死後審判の元となる経典 仏説預修十王生七経が誕生 (偽経) 本経典でこの世とあの世の別離と、中陰三年へ延長

インドの輪廻はこの世で完結する(地獄も歩いて行けるこの世の地続き) 生まれ変わる先は来世であり、中陰はいかなる世界でもない猶予期間である 懲役を課せられた監獄のようなものが地獄(のような来世)である

仏説預修十王生七経(1)

- 正式名称 閻羅王授記四衆逆修七往生浄土経内容は4つ ①閻羅王授記 ②預修生七斎 ③本経典の功徳 ④十王
- □ ①閻羅王授記 世尊が涅槃する際に大衆から閻羅天子を指して、来世は如来となり華厳とい う仏国土の主となるべき存在だと明かす
- □ 閻羅天子=閻羅王=閻魔〔ヤマの音写〕 冥界を仕切っている王であり、なぜ冥界に居るのかというと 地獄の者を導きたいと願った菩薩の別の姿だからである 宋(960-1279)の時代の『地蔵菩薩応験記』で地蔵菩薩の化身と述べられた

仏説預修十王生七経2

□ ②預修生七斎

四衆(仏教集団、僧侶と在家の男女)は生前に毎月2回 生七斎を行なって、十 王に姓名を伝える事で、天曹地府官らが名簿に記録する

死後、中陰となり そこに趣いた際には、四十九日を待たず、十王の元を廻らず、 (子の追善を待たずとも〔追善供養は後世の追記〕)、快楽な場所へ転生すること ができる

もし<u>預修</u>斎を欠かせば、1回ごとに1年転生が遅くなり、一王のもとに滞在して 苦を受けることになる

□ ③本経典の功徳

書写すれば下の三界に生まれ変わることはなく、仏像を作れば閻魔王は罪を許し、 高位に生まれて富貴で長寿となる

三宝を守り、世に流布し、預修の功徳を伝え、発心して仏に帰依し、輪廻の終息を願うように勧めるべきである

仏説預修十王生七経3

□ ④十玉

地獄で死後の審判を行なう十人の王 一七日から七七日、百ヶ日、一年、三年にそれぞれ居る 1年経っても行き先は未定、中陰のままである

□ 特徴

奈河津や閻魔の鏡など、今日の日本の地獄の根本となる「死後の世界」 死者が死後裁かれるという観念(自動的でも能動的でもない) 中国生まれの考え(自業他得→) 「追善斎」も後世に付加されたが、預修斎を 行なう方が7倍功徳があるとされる

インドと中国の廻向

- ロインドの『廻向』→自業自得仏道修行だけでなく、自らの善業をすべて悟りという超俗的な最高の果実に振り向けることができるという思想
- 中国の『廻向』→自業他得 儒教と仏教の融合 遺族が十斎を行なうことで、死後の審判の結果を軽減し、 故人は来世で善処に生まれ変わることができる





古代日本①

- □ 奈良時代
- □ 古事記(712) イザナギが亡き妻の恋しさに黄泉の国を訪れる イザナミが黄泉神に帰る相談をする間、姿を見てはいけないと言われるが、 櫛の歯に火をつけ、腐乱したイザナミを見てしまい驚いて逃げかえった話
- □ 日本の死生観 この世→あの世(徒歩での往来も可)



古代日本②

- □ 奈良時代
- □ 日本書紀(720)

高天原 天神の支配する常世国・不死の国

↓ 下生

葦原中津国 現世 国神が支配 高天原の神々の下生した子孫

↑ 往来可能

黄泉国・根国 黄泉神が支配する死後の世界

素朴な形の天国と地獄、そして朧げな輪廻思想があった ヤマトタケルは白鳥に、田道は大蛇になった

日本の輪廻

- □ 仏教伝来(552)
- □ 預修十王経の伝来(成立は766-826、 それ以降の伝来)

地獄における閻魔の死後審判、六道輪廻、西方極楽浄土など

伝来によって死後観の多彩な広がり

更に『往生要集(984)』による地獄の凄惨な絵図によって、人々は恐怖した



参考:往生要集(1883)吉見重三郎/校正

佛説地藏菩薩發心因緣十王經

□ 仏説地蔵菩薩発心因縁十王経(平安末期~鎌倉初期 1100-1200) 十王に本地仏が当てられている事が特徴

多くの類似・同名経典が存在

①浄土系②天台日蓮系③真言系 が存在 対応する仏はそれぞれで違い、しばらく安定しなかった 浄土系の力が強く、のちに①が主流となる(次頁)

中国の預修十王経に注釈と、日本独自の地獄の鬼(奪衣婆・懸衣翁・賽の河原など)を追記した

第一七日 秦広王(しんこうおう)

二羽のカラスに追い立て られ、鋭い刃のイバラを抜 けて門を通る

死天山を超えるとき、ボロボロになって再度死ぬ

- □ 秦広王
- □ 無益な殺生を問われる 尋問は棒で叩かれ答える のも困難
 - 三途の川はまだ先だ
- ※図説は江戸前期の同経典



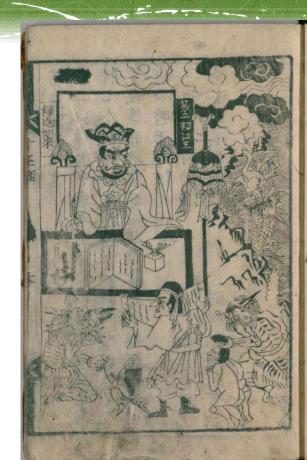


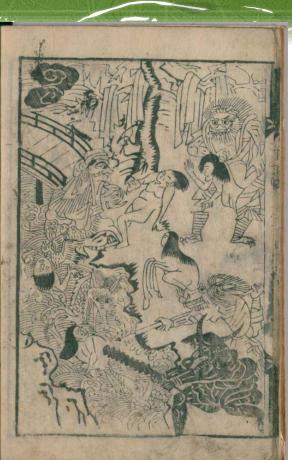
第二七日 初江王

三途の河を渡る亡者 渡る場所は 橋・急流・深みの3つ有る

奪衣婆と懸衣翁が、 服を脱がせて大樹の枝にか けて、罪の重さを量り、王 に報告する

- □ 初江王
- □ 盗みを問われる





第三七日 宋帝王(そうていおう)

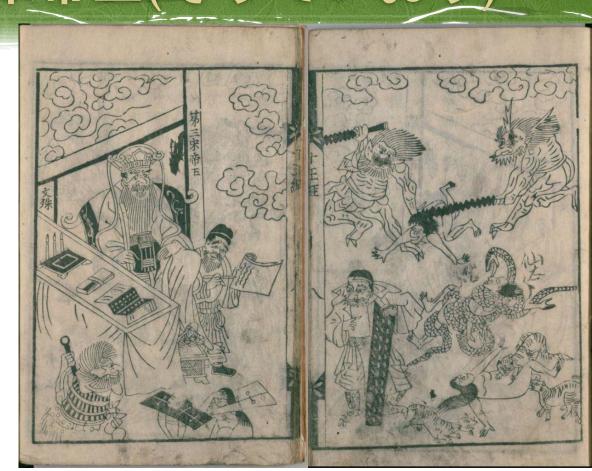
亡者は乳房を破られ体を 縛られる

獄卒は言う

「無慈悲で責めるのではない。汝の邪淫の業のためである。次王の責めはどれほどか、見当もつかぬ。」

- □ 宋帝王
- □ 邪淫を問われる

亡者たちは、地名を聞いて まだここか、と

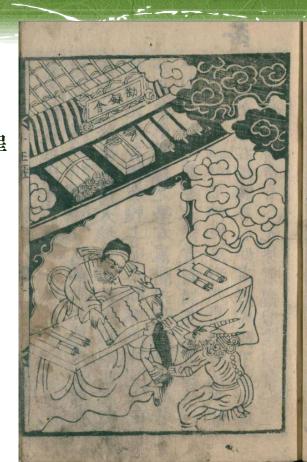


第四七日五官王

天秤で

- 一斤 (600g) を超え、重罪
- 一両(37.8g)は中罪・餓鬼罪
- 一分(0.0004g) は下罪・畜生罪秤に近づくだけで勝手に秤が動き出す、それを検印する隣の勘録舎
- □ 五官王
- □ 不妄語戒など7つの悪業

罪業の軽重は無情にも昔の自分 の所業それだけ





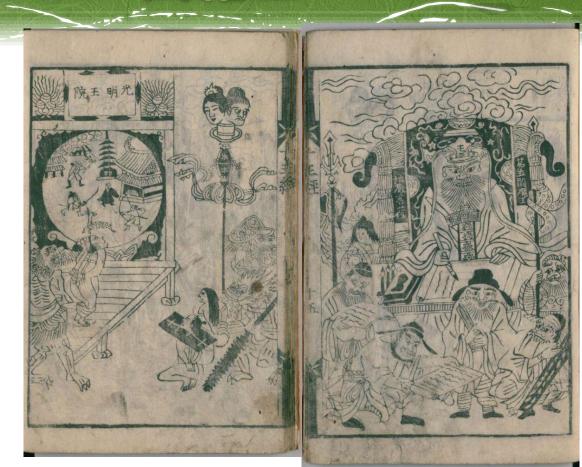
第五七日閻羅王

双童子が生前の全ての善 悪(右左)を記録し閻魔に報 告

光明王院の浄頗梨鏡で亡者 はすべてを写される

「生前にこの鏡を知っていれば悪いことはしなかった」と驚き震える

- □ 閻羅王
- 生まれ変わる六道の決定



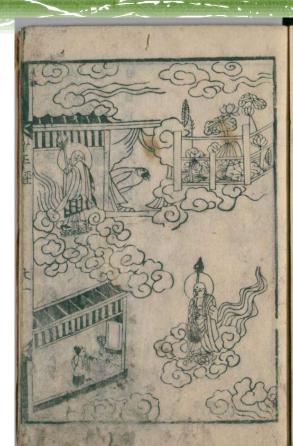
第五七日閻羅王

次に閻魔は

十斎日(月に10日決まった仏 に供養する)を修習する方法 を説く

地蔵菩薩の入定する善名 称院と、地蔵の一切衆生を 救わんとする誓願と功徳を 説く

- □ 閻羅王=地蔵菩薩
- □ 償いの方法を教える



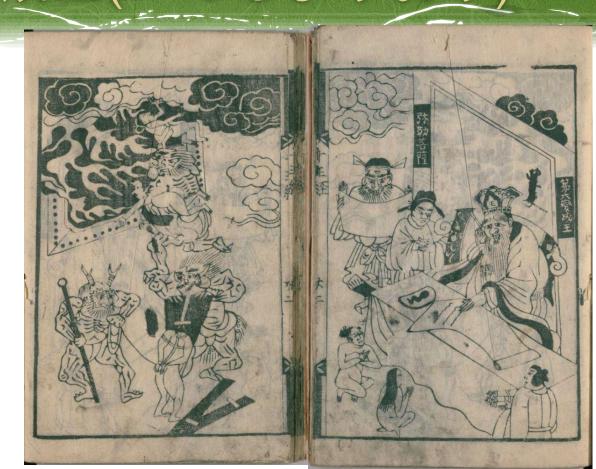


第六七日変成王(へんじょうおう)

罪の軽量は済んでいる 亡者に罪あれば悪を問いつ めて愚かさを戒め、福あれ ば善を勧める

- □ 変成王
- □ 八大地獄の何処へ転生 するかを定める

亡者は恐怖が迫り愚を諭される、仏の功徳を日々願う



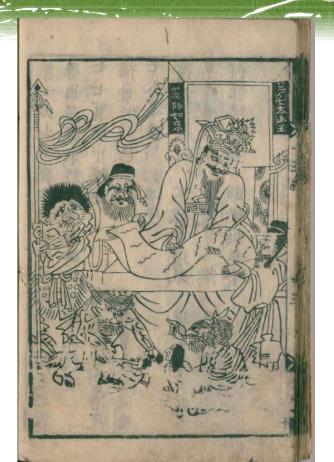
第七七日 大山王(たいざんおう)

中陰が冥途に来てから四十九日 転生の条件を調べる 善業の判決はまだ まだ未確定で、亡者にもたらされる追善 (遺族の功徳)があれば・・・

- □ 大山王
- □ 転生先の父母を求める

亡者は飲まず食わずでもうたまらん 残した財産けちらずに追善を成して我を 助けろ

亡き親が地獄落ち、知らぬ子どもは静か に暮らすのか、地獄の苦しみは何より恐 ろしい



第八百日 平等王

内心は慈悲に満ちているが、外見は憤怒 の表情である

布施する者は教え導き、貪欲者には罰を 与える

- □ 平等王
- □ 貪欲者には追加の罰を与える

亡者は100日経っても苦は止まない 手枷足枷、鞭で血だらけ 生者からの追善供養で生天するやもしれん

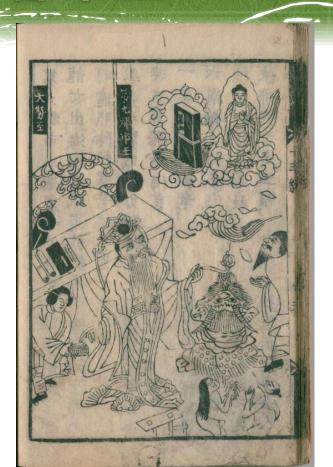


第九一年都市王

1年経って亡者はまだ辛苦する 極悪の者や極善の者は既にしかるべき場 所に転生しており、ここは微悪・微善の 者が訪れる

- □ 都市王
- □ 哀れみにより追善を呼びかける

怒りを捨てて亡者を救えよ 写経や造仏による追善があれば、次は仏 になるかもしれん



第十三年五道転輪王

- □ 五道転輪王
- □ 三度目の関所を超えて ここに来た悪人どもは、不善なす者であり、生まれ 変わっても1000日立たずに死んでしまうだろう
- □ これは放逸と邪見、それこそ過ちで愚痴無智、それは許されなぬ罪
- □ 過と罪が車輪のごとくに回転し、我らは向かう三途の地獄













11-1-1		
	4	
1		
	地	
	CONTRACTOR OF THE PARTY OF THE	
	14	
	14	
W. S.		
The state of the s		

	Ţ
1-1	主
	4
	平地

田子阳

第四七日

五首王

部回

五官王

普賢菩薩

阿児児

4

Ш

第三七日

おおき

部川

宋帝王

文殊菩薩

が大型

4

Ш

第二七日

初江王

部川

初江王

釈迦如来

以芳忌

初七

Ш

舥

4

Ш

またが表

왮

秦広王

不動明王

す 類 忌

仏説預修十王生七経

仏説地蔵菩薩発心因縁十王経

《必必》

北七

ш

第六七

Ш

がは必然田、東西田

第六

変成王

弥勒菩薩

がなる

五七

Ш

第五七

Ш

監羅王

第五

閻魔王

地蔵菩薩

が続いている。

111

加回川

十三化》

第十

III

おおおう王恩然

定空蔵菩薩

がにいる。

ĝ[∐™

十七回記

九回识

《十三化》

第十

進上五

阿陽如来

語が

が作

È[[]ar

+

い回川

十三化》

第十二

技者王

大日如来

称名。

十十回识

中川回川十

十五回忌

愛染男

H3

が大大・で

がい

が同じる。

明実記

が発見

Ç[]w

い回川

第十三年

五道転輪王

第十

五道転輪王

阿弥陀仏

大祥忌

温品

第九

年

巻った

第九

都市王

異本では勢至善羅阿閦如来

が特

Ç[IIa

百箇

Ш

第八百

Ш

主義を

第八

平等王

観世音菩薩

が実践で記述

4

Ш

第七七日

大山王

第十

太山王

薬師如来

大練記

(大斂忌

34

十三仏信仰

- □ 現在の日本は十三仏信仰(14世紀後-15世紀初)
- □ 三仏 (7・13・33年忌) は 室町時代(1336-)に何時の間にか増えていた

日本では古来に30年を弔い上げとした為、 33年を設置したのだろうと言われている





十三仏掛軸 平安 4尺

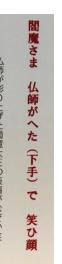
地蔵十王経まとめ

- □ 恐ろしい地獄の様子から、死後そこに故人が行かない為の方法を書いた経典
- □ 浄土教が広めた 人は死後、浄土に行く という常識 本来のインドでは考えられないが、 日本古来の「あの世とこの世」に合致した
- □ 極楽浄土と地獄を 並べて考えるのは日本だけの特徴的なこと



江戸時代

- □ 平和の世で地獄は身近になる
- □ 閻魔大王は話のネタに
- □ 地獄谷が各地に、霊山と隣り合わせ
- □ あの世よりもこの世が地獄であるとも





↑地獄めぐり 別府の血の池地獄温泉

→ 道成寺絵詞(賢学草子) 女性を怒らせると化けて出て追っかけられて奈 落まで連れて行かれる(国立公文書館より)



現在の日本

- □ 三十三年忌は、輪廻とは程遠い インド仏教と袂を分けた中国仏教から更に袂を分けた日本独自の仏教
- □ 皆が僧侶によって浄土へ導かれ、地獄は恐ろしい場所ではなく身近なものである
- □ 言葉の上では、四十九日が満中陰 年忌は三十三年で弔い上げ
- □ 日本人の感覚としては氏神様(一族の始祖) 先祖様←故人の魂家の守り神として永遠に見守ってくれる存在である

参考文献

新

佛教辞典

中村元監修

十三仏信仰の意義 臨済宗黄檗宗連合 各派合議所二〇一六年 宮坂宥洪

岩波 仏教辞典 第二版

民間信仰の話

廣瀬南雄

武田鏡村 日本歴史宗教研究所所長 総図解よくわかる仏教 新人物往来社

宗学概論